

# 記念館オープン特集

## 周布政之助の生涯

(その1)

▲ 周布政之助(1823年～1864年)

八月一日にオープンした「村田清風記念館」の第一展示室には、村田清風と共に周布政之助の遺品が展示されています。二人は幕末に活躍した三隅の偉人ですが、政之助の生き方や功績について清風ほど知られていません。今月号から数回に亘り、周布政之助について連載します。執筆者は、元山口県立博物館長の石原啓司さんです。

### 生い立ち

周布政之助は文政六年(一八二三)萩藩土周布兼正の第五子として萩江向に生まれた。諱を兼翼、字を公輔といひ麻田と号した。

周布家は萩藩の永代家老益田家の分家で、島根県周布町一帯の豪族であったが、益田氏と共に毛利家に仕え、慶長以後は萩に移った家柄であった。

周布の母は村田清風の近親であり、加えて父、兄が幼少期に没したこともあり、母と村田清風の薫陶を受けて成長した。

### 明倫館に学ぶ

天保十一年(一八四〇)十六歳で藩校明倫館に入学し、文武の修業に励み、二十二歳の時「明倫館廟司」に任命された。廟司とは明倫館にある孔子など聖賢の廟(位牌)を管理する役で、生徒の内成績優秀者が任命された。

若き日の村田清風・高杉晋作

も廟司に任命されており、廟司任命者は後年、長州藩政に名をなす人が多かったのである。

周布政之助の藩政への登用は弘化四年(一八四七)九月の蔵元検使暫役として

山口に駐在した二十五歳の時から、元治元年(一八六四)九月に四十二歳で自刃するまで十七年間に及んでいる。

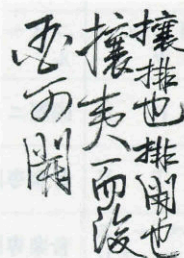
この間、周布政之助は、村田清風が推進した富国強兵を目標とした藩政改革をひきつぎ、明治維新への道を開いた尊王攘夷運動に全力を傾注した。

### 嚶鳴社

嚶鳴社は弘化三年(一八四六)周布政之助・北条瀬兵衛が中心となって明倫館内に創設された若手藩士の政治研究会である。

設立の趣旨は、当時の明倫館の学生が、儒教の学習に満足している気風を憂慮し、日本、中国の歴史を学び、相互に討論し、外国船の接近という外圧に対処する時事問題を研究しようとしたものである。

参加者が十数名となった安政四年(一八五七)社屋を明倫館から萩城下の河添の地に移した。主な参加者は口羽徳祐、中村九郎、来原良蔵、佐久間左兵衛、松島剛蔵らで、後年、長州藩が尊王攘夷運動を推進する際、藩



政府の要路に抜擢されて活躍した人々であった。

周布政之助を中心とするこれら藩政改革派は村田清風を指導者として尊敬し、一般に正義派と呼ばれた。これに対し、

保守派を俗論派と呼んだのである。

周布政之助の政治家としての活動は次回に述べるが、今回は嚶鳴社グループと松下村塾グループについて説明する。

安政五年(一八五八)の嚶鳴社の会合には、久坂玄瑞、杉梅太郎(吉田松蔭の兄)、勤王僧として有名な黙菴も出席している。しかし、安政五年六月、幕府が朝廷の勅許を得ずに日米通商条約を締結したことに対し、吉田松蔭を中心とした松下村塾グループは、井伊大老の幕政批判を強め、周布派との対立を深めたのである。

嚶鳴社の活動は、松下村塾グループとは異なるが、安政五年の周布政之助らによる安政改革は、人材登用などによる挙藩一致体制を確立しようとするもので、兵制改革、農兵取立など富国強兵を進め、迫り来る外圧に対処するものであった。

松下村塾門下生の活動が討幕路線で開花したせい、周布政之助を中心とする嚶鳴社グルー

プの尊王攘夷運動の役割を忘れてがちであるが、幕末長州藩の藩政改革と明治維新への道をきりひらいた業績を忘れることはできない。

### 政務役に任官

二十五歳で藩にはじめて登用された周布は、嘉永五年(一八五二)、二十歳のとき政務役に抜擢された。この時の上役が椋梨藤太である。

この二人は嘉永六年ペリーの浦賀来航に際しては長州藩を代表して、大森警備につとめ、幕府よりその対応の良さをほめられている。

周布は、この年九月に政務役筆頭の椋梨藤太に代って筆頭となり長州藩の若手官僚の第一人者となった。時に三十一歳であった。

これから政之助が長州藩政治舞台でその中心的役割を果たしていくことになる。

なお、ペリーの開国要求に対しては、主戦論を唱えて貿易は拒絶すべきであると藩主に建言し、安政元年(一八五四)には、村田清風の志をうけて藩財政を立て直しを図り、他日の変事に備えようとした。

しかし、この財政改革はまたしても保守派の反対にあい、政務役筆頭を辞職した。

周布の藩政府再登場は安政四年(一八五七)の先大津代官の任命である。